

Wordsworth as a Proto-Ecologist : With
Reference to 'the Book in Nature' and 'Nature
in the Book' (In Honour of Professor Masaaki
Yoshino On the Occasion of His Retirement)

Yamauchi Shoichi
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1354664>

出版情報 : 英語英文学論叢. 49, pp.15-35, 1999-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

プロト・エコロジストとしてのワーズワス⁽¹⁾

— 〈自然の本〉と〈本其自然〉をめぐって—

山内正一

“Come forth into the light of things,
Let Nature be your teacher.”

近年、アメリカ産のいわゆる「エコクリティシズム」の観点に立ち、イギリス・ロマン派（特にワーズワス）をプロト・エコロジストとして位置づけ、彼らが広い意味での環境問題に対し先駆者としていち早く警鐘を鳴らしていたことが指摘されている。英国人 Jonathan Bate の著書 *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition* (London: Routledge, 1991) が先鞭をつけ、アメリカの学者 Karl Kroeber が *Ecological Literary Criticism: Romantic Imagining and the Biology of Mind* (New York: Columbia U. P., 1994) でさらに展望を切り開くという形で、「ロマンティック・エコロジー」研究は著しい進展を見せ始めた。

Bate は「新歴史主義」に代表される第二次大戦後の冷戦構造（左派/右派對立）イデオロギー批評の欠陥を指摘する。この「英国の」学者・批評家は、マルクス主義唯物論に立脚する新歴史主義批評家たちのワーズワス批判を論駁するのである。新歴史主義批評家は、ワーズワスに代表されるロマン派詩人を個人主義的観念論・理想論に染まったエリートと看做し、そのブルジョアの独善性（Jerome J. McGann がマルクスの *The German Ideology* をもじって *The Romantic Ideology* と呼ぶもの）⁽²⁾を糾弾する。ロマン派の自然観に潜む欺瞞性（自己/現実逃避願望）を見抜けず、いたずらに観念的・超絶的

(1) 本稿の一部は、日本英文学会九州支部第51回大会でのシンポジウム「ロマンティック・エコロジーのゆくえ——ワーズワス、ロレンス、ジェファーズ」（1998年10月24日、九州産業大学にて開催）において既に口頭発表されたものである。このテーマについて考察を深める機会を与えてくださった、シンポジウムの司会者の西村岩雄氏、共同発表者の田部井世志子、馬本誠也、西村杏子の諸氏（いずれも「福岡ロレンス研究会」会員）に感謝します。

(2) Cf. Jerome J. McGann, *The Romantic Ideology: A Critical Investigation* (Chicago: The Univ. of Chicago Pr., 1983), pp. 8, 153ff.

想像力論の枠組みの中でロマン派を論じようとした（と新歴史主義者は考える）イェール学派に対して新歴史主義批評家たちの批判の矛先が向けられたのは、当然の成り行きであった。

Bateの姿勢は、イェール学派の行き過ぎを批判的に視野に入れつつも、唯物思考に偏った新歴史主義の自然/環境観を修正しようとするものである。私は、基本的にはBateの立場に立ち、J. S. Mill, John Ruskin, Leslie Stephenらヴィクトリア朝時代の知識人が高く評価した「自然詩人」ワーズワスをエコロジー思想の先駆者という観点から再評価してみたい。その際、近年喧伝されている「エコクリティシズム」の思わぬ盲点——Kroeberの上掲著書にも見られる科学/知性（もしくは「物質」）重視に由来する盲点⁽³⁾——にも触れることになろう。

(一)

イギリス・ロマン派の（とりわけワーズワスの）「自然」に見られる際立った特徴は、それが二重構造を持った「自然」である、というところにある。この特徴をより鮮明にするためには、ロマン主義の時代に先行する、いわゆる「新古典主義」の時代に現われた自然観を概観しておく必要がある。18世紀のイギリスを支配したこの自然観は、基本的にはニュートンの宇宙観に基づくものである。そこでは、自然は、宇宙万物を統治する神の普遍的力（＝「法則」）の下に整然と秩序づけられて動く、機械論的自然（物質としての自然）として捉えられている。この自然は、ヨーロッパ啓蒙主義の落とし子である理神論 Deism もしくは自然宗教 Natural Religion が説く自然に外ならない。

理神論は、理性が許す範囲内でのみ神の存在を認めようとする立場をとる。したがって、理神論者は従来のキリスト教が説く超自然的な啓示や奇跡の類を排除する。H. N. Fairchildの言葉を借りて言えば、理神論の所説は次のように要約できる——“To the deist, God does not reveal himself through scripture, through the traditions of the church, or even through personal religious experience. He reveals himself solely through his creation—a universe operating according to natural laws with which,

(3) Cf. Karl Kroeber, *Ecological Literary Criticism: Romantic Imagining and the Biology of Mind* (New York: Columbia U. P., 1994), pp. 9, 35-36, 44, 65, 142.

once having enunciated them, he is sensible enough not to interfere. This God is neither a stern lawgiver nor a loving father, but a colorless abstraction inferred to satisfy the demands of logic.”⁽⁴⁾理神論者にとっての「自然」は、言わば〈ぜんまい仕掛けの時計〉の様な存在である。それは、機械工（創り主）たる神によって付与された絶対の「法則」に従って動きはするが、その運動自体は自らの意志を持たず、単なる機械・物質として存在するにすぎない。ロマン派の詩人たちが、この種の自然を〈生命を持たぬ存在〉と見なし、これに強く反発したのは当然予想されることであった。

ワーズワスにとっての「自然」とは、躍動的で神秘的で、見る目、聞く耳を持つ者には絶えず永遠の真理を語りかけ、不滅の喜びを与えてくれる、一個の〈有機的生命体〉である。それは単なる機械・物質に留まるものではなく、神の分身、いや神そのもの、ともいうべき〈意志と知性を備えた存在〉なのである。そこにはキリスト教が主張する類の被造物と創造主の間の厳密な区別は見られない。この様なワーズワス独特の自然観に呼び名を与えるとすれば、それは汎神論 pantheism や物活論 animism と呼ばれているものに非常に近いものとなるように思われる。ちなみに、*OED* は「アニミズム」を次のように定義する——(1) “the doctrine that the phenomena of animal life are produced by an immaterial *anima*, soul, or vital principle distinct from matter.”, (2) “The attribution of a living soul to inanimate objects and natural phenomena.”, (3) “The belief in the existence of soul or spirit apart from matter, and in a spiritual world generally.” *OED* が挙げるこれら三種の語義を通しての初出例は、1832年のものであり、この語がロマン主義の土壌の中から生まれたものであることを示唆している。定義(3)の例として挙げられている1880年の使用例中には“Animism, the belief in spiritual and unseen agencies”という語句も見える。この様な「アニミズム」の特徴を最もよく表わしているロマン派の詩人が、ワーズワスである。ただし、それは1807年詩集の頃までのワーズワス（37歳位までの詩人）であって、後年のワーズワスはコールリッジ——ワーズワスのアニミスティックな自然観・神観に批判的であったコールリッジ⁽⁵⁾——と共に著しく保守化し、伝統宗教としてのキリスト教への傾斜を深めていく（ちなみに、ワーズワスは80歳まで生き、70歳過ぎまで詩を書き続けた）。

(4) H. N. Fairchild, *The Romantic Quest* (New York: Columbia U. P., 1931), pp. 166-67.

ワーズワスの代表作と言え、もちろん自伝的長編詩 *The Prelude* であるが、この詩が1850年（詩人の死後）に出版された時、そこには既にキリスト教詩人ワーズワスによる大幅な改訂が施されてしまっていた。実は、この長編詩は実際の出版の45年も前、1805年（詩人35歳の時）に一旦完成されていたのである。ここでは、その1805年版 *The Prelude* 制作のための準備段階として1799年に書かれた、*The Two-Part Prelude* の一節を借りて、ワーズワスの〈アニミステックな自然観〉の一端を示してみたい。

I believe

That there are spirits which, when they would form
 A favored being, from his very dawn
 Of infancy do open out the clouds
 As at the touch of lightning, seeking him
 With gentle visitation—quiet powers,
 Retired, and seldom recognized, yet kind,
 And to the very meanest not unknown—
 With me, though rarely, in my boyish days
 They communed. Others too there are, who use,
 Yet haply aiming at the self-same end,
 Severer interventions, ministry
 More palpable—and of their school was I.

(*The Two-Part Prelude*, I, 68-80)⁽⁵⁾

ワーズワスは主張する——自分の幼少時代には、時に優しく、時に厳しく

(5) コールリッジの次の発言は、批判的な立場からなされたものではあるが、ロマン派詩人ワーズワスの作品の特徴を的確に捉えている——“I will not conceal from you that this inferred dependency of the human soul on accidents of birth-place and abode, together with the vague, misty, rather than mystic, confusion of God with the world, and the accompanying nature-worship, of which the asserted dependence forms a part, is the trait in Wordsworth's poetic works that I most dislike as unhealthful, and denounce as contagious.” See Thomas Allsop, ed., *Letters, Conversations and Recollections of S. T. Coleridge*, 2 vols. (London, 1836), I, p. 107, cited in Jonathan Bate, *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition* (London: Routledge, 1991), p. 92.

詩人の魂 (soul/spirit) に働き掛け、幼い魂に教育を施してくれる自然界の精霊 (“spirits”) がいたことを。つまり、かれら自然界の精霊たちは、幼いワーズワスにとって、言わば教師であり、自然界は「教場／学校」であった、というのだ。このように、ワーズワスの「自然」は、人間に教えを垂れることも可能な<意志と感情と知性を備えた霊的な存在 (spirit)>なのである。ワーズワスの自然体験ならびにその体験の記録としての彼の作品は、繰り返し繰り返し次の事実を主張する——自然界の万物には「自然」の靈魂 (soul/spirit) が宿っており、その靈魂 (Nature-God) と人間の靈魂 (soul/spirit) との間には、自然界の精霊たち (spirits) を媒介として、絶えざる交流／交渉 (intercourse, communion) が行なわれている、と。

この章の冒頭で、筆者は「ロマン派の自然の二重構造」に触れたが、そのことの意味はもはや明白であろう。「ロマン派の自然の二重構造」とは、物質 (matter) 次元の自然と精神／霊 (spirit) 次元の自然とが織りなす二重構造に外ならない。このことを念頭に置いて読めば、たとえば虹という自然現象を歌った次の詩なども実に深い奥行きを持つものであることが判る。

My heart leaps up when I behold
 A Rainbow in the sky:
 So was it when my life began;
 So is it now I am a Man;
 So be it when I shall grow old,
 Or let me die!
 The Child is father of the Man;
 And I could wish my days to be
 Bound each to each by natural piety. (1802年作)

ニュートンが明らかにした通り、物質レベルでの虹は、光のプリズム現象の表れにすぎない。我々が知性や理性のレベルで（つまり科学の知見のみに頼って）この現象を理解しようとするかぎり、そこには自然の生命も神秘も

(6) ワーズワスの作品からの引用のうち *The Prelude* 関連のもの (1799年版, 1805年版) は, Jonathan Wordsworth et al., eds., *The Prelude: 1799, 1805, 1850* (New York: Norton, 1979) に拠る。他は, Stephen Gill, ed., *William Wordsworth* (Oxford: O. U. P., The Oxford Authors, 1984) に拠る。

存在しえない。しかし、ワーズワスの心眼 (*I wandered lonely as a cloud*, l. 15: “that inward eye”)⁽⁷⁾は、そこにもう一つの虹を見て取る。それは、聖書が語るところの、人類への神の契約の徴としてのあの虹にも繋がるものである。⁽⁸⁾「年老いてもなお、空に架かる虹を見るたびに心が弾むのでなければ、いっそ死んだ方がましだ」という一見大仰にも見える表現は、間違いなくワーズワスの本心を語っている。何故ならば、「自然」を見て、そこに単なる物質存在しか認めえず、自然の霊の躍動（美として表れる自然の霊の生命活動）を全く感じ取ることが出来なければ、それは人間の本性 (human nature) の喪失に外ならないからだ。虹の美しさに感動する心は自然の霊 (Nature-God) への敬虔な祈り・信仰 (“natural piety”) の証である、というのがワーズワスの信念なのだ。

前置きの部分が長くなったが、プロト (原型的)・エコロジストとしてのワーズワスを論じる場合、以上の点を理解しておくことが必須条件となる。

「エコロジー」という語は、本来生物学の一分野を指す単語で、生物と環境との相互作用を研究する学問を意味する。しかし、この語は今日ではもっと広い意味内容を獲得するに至った。自然の生態系の破壊が急速に進行する現在、エコロジーなる語は広範な分野にまたがる自然環境保護運動の総体を指すものとなってきている。すなわち、エコロジー運動は、自然保護、安全食品運動、公害反対、原子力施設・核兵器反対、反戦・平和運動等々の領域を包括するものである。言うまでもないことだが、18~19世紀に生きたワーズワスがこれらすべての分野において「プロト・エコロジスト」と呼ばれうるはずがない。たしかに『湖水案内』 (*Guide to the Lakes*, 1810年初版発行) の作者としてのワーズワスには自然保護論者、公害反対論者としての顕著な特徴が認められはする。だが、「プロト・エコロジスト」としてのワーズワスの真骨頂は、もっと本質的なところにあるように思われる。エコロジーを語るときにしばしば言及される言葉に‘holism (wholism)’ (全体論)がある。「複雑な体系の全体は個々の部分や機能の単なる寄せ集めではなく、各部分を決定する統一体である」という‘holism’の思想をエコロジーの言葉に置き換えて言えば、こうなるだろう——「生物と自然環境は一つの生態系 (全体) を

(7) Stephen Gill 編のワーズワス詩集はこの詩の1807年版を採用しており、そこでは1815年版の第2連が省略されている。See Stephen Gill, *op. cit.*, pp. 303-304.

(8) See *Genesis*, 9: 13: “I do set my bow in the cloud, and it shall be for a token of a covenant between me and the earth.”

形成し、そこではすべての要素（部分）が相互依存関係にある。したがって、この生態系中の個々の要素の破壊は、全体の破壊へと必然的に波及する性質のものである。個は全体なくして存立しえず、全体もまた個なくしては存在しえない」。エコロジー思想のこの基本前提を受け容れるとき、我々はワーズワスを確かに「プロト・エコロジスト」と呼ぶことができる。

しかし、ワーズワスと現代の（特に科学知や合理主義に依拠する）エコロジストとの間には超えがたい溝があることも忘れてはならない。なるほど現代の科学者も自然万物にある種の〈生命エネルギー〉の存在を認めるかもしれない。だが、ワーズワスが自然界に見る「生命」(life) は、物質次元を超越した、一つの霊 (spirit) の動き、働きとしか表現できない質のものなのである。1805年版 *The Prelude* の次の一節に、そのことは典型的に窺える。

... and now at length

From Nature and her overflowing soul
 I had received so much, that all my thoughts
 Were steeped in feeling. I was only then
 Contented when with bliss ineffable
 I felt the sentiment of Being spread
 O'er all that moves, and all that seemeth still,
 O'er all that, lost beyond the reach of thought
 And human knowledge, to the human eye
 Invisible, yet liveth to the heart;
 O'er all that leaps, and runs, and shouts, and sings,
 Or beats the gladsome air; o'er all that glides
 Beneath the wave, yea, in the wave itself
 And mighty depth of waters. Wonder not
 If such my transports were; for in all things
 I saw one life, and felt that it was joy;
 One song they sang, and it was audible—
 Most audible then when the fleshly ear,
 O'ercome by grosser prelude of that strain,
 Forgot its functions and slept undisturbed.

(II, 415-34)⁽⁹⁾

ワーズワスにとって、この様に「自然」は魂（“soul”）を持ち、感情（“sentiment”）を持った存在である。自然万物には、それが地上の獣であれ、空を飛ぶ鳥であれ、水中の魚であれ、「一つの生命」（“one life”）が宿っている、と詩人は主張する。自然万物は一体となって喜びの歌を、「一つの生命の歌」（“One song”）を歌う。しかも、この歌は肉体の耳にはなく、聞く者の魂（soul/spirit）に直接響く類の歌なのだ。⁽¹⁰⁾ワーズワスの「自然」が単なる物質的存在に留まらないのは、もはや自明のことである。プロト・エコロジストとしてのワーズワスと現代の多くのエコロジストとの決定的相違点がここにある。ワーズワスをエコロジストの先駆けであると主張するのであれば、この相違点を十分に認識した上でのことでなければならぬ。

(二)

前章では「若きワーズワスにとって自然は教師であり、自然界は教場であった」という点に触れた。このことを如実に、そして平明に歌った作品がある。その作品とは、*Expostulation and Reply*（1798年作）と*The Tables Turned*（1798年作）というペアをなす二つの詩である。「形勢逆転」（*The Tables Turned*）と題された次の詩は、先行する *Expostulation and Reply* の続編として書かれている。

Books! 'tis a dull and endless strife,
Come, hear the woodland linnet,
How sweet his music; on my life
There's more of wisdom in it.

And hark! how blithe the throstle sings!
And he is no mean preacher;
Come forth into the light of things,
Let Nature be your teacher.

(9) 420行目の“Being”については、Stephen Gill 編のワーズワス詩集や Ernest de Selincourt and Helen Darbishire, eds., *The Prelude* (Oxford: Clarendon, 1959) の読みに従った。

(10) 同様の思考は *Tintern Abbey Lines*, ll. 42-50, 89-103 にも見られる。

She has a world of ready wealth,
 Our minds and hearts to bless—
 Spontaneous wisdom breathed by health,
 Truth breathed by cheerfulness.

One impulse from a vernal wood
 May teach you more of man;
 Of moral evil and of good,
 Than all the sages can.

Sweet is the lore which nature brings;
 Our meddling intellect
 Mis-shapes the beauteous forms of things;
 —We murder to dissect.

Enough of Science and of Art;
 Close up those barren leaves;
 Come forth, and bring with you a heart
 That watches and receives.

(ll. 9-32)

Expostulation and Reply では、無為の内に半日近くを過ごしている少年 William に対して、年長の友（おそらくは彼の教師）Matthew は、「本」をとって勉学に励むことを忠告する。Matthew にとって、書物は人類の貴重な遺産であり、その意味で「本」は“light” (l. 5) であり“spirit” (l. 7) である。これに対し William は、「自然」の内にはある種の力が宿っており、目や耳（即ち五官）を研ぎ済ませて自然の世界に身を沈めれば（つまり“a wise passiveness” [l. 24] を行使すれば）、我々の心は「自然」が人間に語りかける真理を聞き取ることが出来る、と考える。ここから後続の詩 *The Tables Turned* における William 少年の反駁・反論が生まれる。William は、「本」を読む作業を「退屈ではてしのない戦い」と考え、野性の小鳥のさえずりの中にこそ一層多くの「英知」を見出すことが出来る、と主張する。書物の知識よりも「自然」の英知を重視するという態度は、イギリス・ロマン派に広

く見られる反知性主義 anti-intellectualism の表れと言えよう。つまり、「理性」に優る「衝動(的感情)」“impulse” (l. 21) の重視である。この意味で、*The Tables Turned* 第7連 (ll. 25-28) は重要な意味を持つ。第7連でワーズワスは、自然の美を解剖し、分析し、切り刻み、台無しにしてしまう人間の知性 intellect, 理性 reason の専横・独裁を非難する。こういう反知性主義, 反合理主義 anti-rationalism の姿勢は、イギリス・ロマン主義に共通に見られるものとして(また、D・H・ロレンスなどにも受け継がれるものとして)注目に値する。

それでは、啓蒙主義と新古典主義の時代にあれほど称賛された〈知性〉や〈理性〉に反逆することをワーズワスに可能ならしめたものは、一体何だったのであろうか。結論を先に述べれば、それは「自然」と「人間性」(human nature) という二つの‘Nature’に対する絶大な信頼であった。*The Tables Turned* 第5連 (ll. 17-20)にある通り、William すなわちワーズワスは、「自然は、我々の知性(minds)と感情(hearts)に恵みを与えるばかりに準備された、豊かな富を持っている」と考える。その富とは、「我々が健康であれば自ずと我々の心に吹き込まれる英知」であり、「我々が快活であれば心に吹き込まれる真理」なのだ。18世紀の新古典主義の詩人たちは、〈英知〉や〈真理〉を獲得する唯一の手段として知性や理性の重要性を説く。しかし、注目すべきことに、ロマン派の詩人ワーズワスは、intellect や reason に代わる手段として“health”と“cheerfulness”を挙げる。「健康」と「快活さ」、それは人間が何物にも拘束されずに本来の姿を保持している状態に外ならない。つまり、ワーズワスはこう考えるのだ——人間は、本来の肉体(health)と本来の精神(cheerfulness)を保持することで、己れの魂(soul/spirit)と自然の魂(soul/spirit)との交わり(communion)を実現し、その結果として人間存在の本質に関わる「英知と真理」を獲得することが出来る、と。これは、ルソーに代表される〈人間性に対する限りない信頼の表明〉であり、このような人間の無限の可能性に寄せる信頼こそが、ロマン派の根幹を成すものである。ロマン派の詩人たちにとって‘Nature’とは、「自然(界)」を指すと同時に「自然な状態、あるがままの状態、何の拘束も受けない状態」に繋がるものでもあった。ここで確認しておきたいのは、ワーズワスが「賢明なる受動状態」(“a wise passiveness”, “a heart/That watches and receives”)の重要性を主張する時、彼がこれら二つの‘Nature’の本質的同質性(同じ spirit を共有する存在としての同質性)を信じ切っている、ということ、そして、その背

後には自然万物を生かす根源としての神 (Nature-God) ——キリスト教の神とはかなり異質の神——が存在している、という事実である。

ワーズワスの自然観と新古典主義者や啓蒙主義者(とりわけ理神論者たち)の自然観の間の相違点は、〈本(教材)としての自然〉というメタファーの捉え方に際立った形で表れる。理神論者にとって、創造主が創り、人類に遺した自然は、自然界を支配する諸原理、諸法則を理性の力で発見するための得難い〈科学的教材〉であった。つまり、彼らにとって、自然は神の摂理を理性レベルで知的に把握するための「本」となったのである。ワーズワスが「捨てよ」と主張するのは理神論者のこの種の教科書であり、そのような教材の原典として利用された〈歪曲された自然／本〉なのである。

Enough of Science and of Art;
Close up those barren leaves;
Come forth, and bring with you a heart
That watches and receives.

(ll. 29-32)

科学や技術はもう沢山。
その不毛な本のページを閉じて、
外へ出ておいで、見つめて受け入れる
心ひとつを携えて。

科学・学問や技術の書物を捨てて、代わりに詩人が手に入れ、愛好する「本」は次のような〈本物の自然〉が提示してくれる光景であった。

Therefore am I still
A lover of the meadows and the woods,
And mountains; and of all that we behold
From this green earth; of all the mighty world
Of eye and ear, both what they half-create,
And what perceive; well pleased to recognize
In nature and the language of the sense,
The anchor of my purest thoughts, the nurse,
The guide, the guardian of my heart, and soul

Of all my moral being.

(*Tintern Abbey Lines*, ll. 103-112)

ここでは自然界が、詩人の耳に届き目に映じる「感覚の言葉」で書かれた「本」としてイメージされている。⁽¹¹⁾だが、我々は既に知っている、ワーズワスにとってはこの「本」が実は「感覚の言葉」以上のものであったことを。同じ詩の前段で詩人はこうも歌っているからだ――

... that serene and blessed mood,
 In which the affections gently lead us on,
 Until, the breath of this corporeal frame,
 And even the motion of our human blood
 Almost suspended, we are laid asleep
 In body, and become a living soul:
 While with an eye made quiet by the power
 Of harmony, and the deep power of joy,
 We see into the life of things.

(ll. 42-50)

ワーズワスにとって、自然という「本」の表面的文字 (“the language of the sense”) の背後に潜む真義を読みとる (“see into the life of things”) のは、肉体感覚ではなく霊魂 (“a living soul”) の役目なのである。このことは、自然が物質であるのみならず、その本質において霊的存在 (spirit) でもあることを改めて主張する。この意味において初めて、ワーズワスにとっての自然は「教師」となりうるのだ (“The anchor of my purest thoughts, the nurse, / The guide, the guardian of my heart, and soul / Of all my moral being”)

(11) これと類似した思考法を我々はコールリッジにも見出すことが出来る。See *Frost at Midnight*, ll. 58-64: “...so shalt thou see and hear/ The lovely shapes and sounds intelligible/ Of that eternal language, which thy God/ Utters, who from eternity doth teach/ Himself in all, and all things in himself./ Great universal Teacher! he shall mould/ Thy spirit, and by giving make it ask.”コールリッジの詩の引用は、Ernest Hartley Coleridge, ed., *Coleridge: Poetical Works* (1912; rpt. Oxford: O. U. P., 1973) に拠る。

ここで、「エコクリティシズム」の分野で問題にされることの多い語句“the sense of the place”と“the spirit of the place”についてしばらく考察したい。それを「土地の感覚」と訳そうと、「土地の意識」と呼ぼうと、⁽¹²⁾その土地に宿る精霊・守護霊、つまり語源的意味での“the spirit of the place” (= *genius loci*) への理解が無ければ、“the sense of the place”なる語句にはワーズワス流の「ロマンテック・エコロジー」の理解に資するところは少ない。いやむしろ、場合によってはこの語句の使用は有害ですらあるだろう。ワーズワスとの関連で、イギリスの湖水地方の“the sense of the place”を問題にするのであれば、この語句はどうしても“the sense of [the spirit of] the place”——上に述べた意味での——として用いられねばなるまい。この問題に側面光を投げかけるものとして、ワーズワスの〈書物論〉が役に立つ。

“Books”という副題を持つ *The Prelude* (1805年) 第5巻は、ワーズワスが〈真実の本〉と考えるものを読者に提示してくれる。それは、内に「霊(の力)」を宿す類の本である——

A gracious spirit o'er this earth presides,
 And o'er the heart of man: invisibly
 It comes, directing those to works of love
 Who care not, know not, think not, what they do.
 The tales that charm away the wakeful night
 In Araby—romances, legends penned
 For solace by the light of monkish Lamps;...

(V, 516-22)

どうやらワーズワスは次のように考えているらしい——自然(大地)にも人の心にも、そしてある種の「本」(「愛」の精神で書かれた本)にも、「恵み深い霊」の働きかけが認められる、と。詩人にとっての〈真実の本〉とは、したがって、まず第一にこの霊的な「力」を宿し、霊的次元で読者の心を動かす本でなければならない。しかしそのような「力」を容れる器としては、本は——大自然に比べれば——何とひ弱な存在であろうか、というのが詩人の次の嘆きである。

(12) 石幡直樹氏は、『英語青年』1998年11月号(p.5)で、“Sense of Place”を *genius loci* の意味合いを込めて「土地意識」と呼びうる余地があることを指摘しておられる。

Oh, why hath not the mind
 Some element to stamp her image on
 In nature somewhat nearer to her own?
 Why, gifted with such powers to send abroad
 Her spirit, must it lodge in shrines so frail?

(V, 44-8)

ワーズワスにとって、本の生みの親であり同時に本の内容物でもある「人間の精神・知性」は、本質において霊的特性を帯びている。逆に言えば、この霊的特性を欠く書物は「本」の名に値しないのである。この意味で、「自然」は詩人にとって理想的な「本」と目される資格を確かに有していた――

Hitherto

In progress through this verse my mind hath looked
 Upon the speaking face of earth and heaven
 As her prime teacher, intercourse with man
 Established by the Sovereign Intellect,
 Who through that bodily image hath diffused
 A soul divine which we participate,
 A deathless spirit.

(V, 10-17)

「自然」との交流（“intercourse”）が自然の靈魂と詩人の靈魂との交わりであるとするならば、〈真の意味での読書〉も本の靈魂と読者の靈魂との間に成立する同種の交流である。つまり、ワーズワスにとっての読書とは、「本」という場所（*locus*）に宿る霊 *genius loci* と読者の霊（“A deathless spirit”）との交わりに他ならないのだ。The *Prelude* 第5巻に挿入されたアラブ人の夢のエピソード（II. 49-139）も、「本」に潜む霊力が読者の霊に働きかけ、睡眠中に夢（ヴィジョン）を現出せしめた事例の提示と解すれば、なぜこの話がここに挿入されねばならなかったのか容易に頷ける。ついでに言えば、同じ第5巻中のフクロウと少年をめぐるもう一つの挿話（II. 389-422）は、「自然（の霊）」によって少年（の靈魂）に施される、フクロウという教材（本）を用いた教育の在り様を描くところに眼目があったはずである。それが、こ

の挿話が“Books”という副題を持つ巻中に収められた所以である。また、この少年の挿話は、人間の魂を育む教材としては書物が「自然」に一步を譲らざるをえないことをも示唆している。何故なら、「自然の本質は、神の息／霊そのものである」からだ——

It seemeth in behalf of these, the works,
 And of the men who framed them, whether known,
 Or sleeping nameless in their scattered graves,
 That I should here assert their rights, attest
 Their honours, and should once for all pronounce
 Their benediction, speak of them as powers
 For ever to be hallowed—only less
 For what we may become, and what we need,
 Than Nature's self which is the breath of God.

(V, 214-22)

ワーズワスの所信がこの様なものであったとすれば、結局、「本」は——それが本物に近づけば近づくほど——「自然」と一体化してしまう。つまり、〈自然の本〉と〈本の自然〉とがひとつに溶け合ってしまうのだ。下の詩句が言わんとするのは、まさにこのことであった。

Here must I pause: this only will I add
 From heart-experience, and in humblest sense
 Of modesty, that he, who in his youth
 A wanderer among the woods and fields
 With living Nature hath been intimate,
 Not only in that raw unpractised time
 Is stirred to ecstasy, as others are,
 By glittering verse, but he doth furthermore,
 In measure only dealt out to himself,
 Receive enduring touches of deep joy
 From the great Nature that exists in works
 Of mighty poets. Visionary power

Attends upon the motions of the winds
Embodied in the mystery of words;...

(V, 608-21)

「言葉の神秘という形で具現化された風のそよぎ」こそ、先ほどの「神の息／＼」(V, 222)に他ならない。とすれば、未来の子供たち(V, 436: “A race of real children”)に施されるべき理想の教育をワーズワスが次のように念じたのも当然であった。

May books and Nature be their early joy,
And knowledge, rightly honored with that name—
Knowledge not purchased with the loss of power!

(V, 447-49)

『湖水案内』でワーズワスが自然への人間の破壊行為を非難するとき、教材(本)破壊のメタファーが用いられる理由がここにある。プロト・エコロジストとしての詩人の側面を顕著に示すこの散文作品の随所で、ワーズワスは湖水地方で当時進行していた自然環境破壊に対し警鐘を鳴らす。その中で、詩人は Ullswater 湖の岸辺で行なわれた森林伐採の傷跡を次のように嘆くのである——

...but those beautiful woods are gone, which *perfected* its seclusion; and scenes, that might formerly have been compared to an inexhaustible volume, are now spread before the eye in a single sheet, —magnificent indeed, but seemingly perused in a moment!⁽¹³⁾

かつては「読めども読み尽くすことの出来ない大部の本」(“an inexhaustible volume”)とも見えた自然の風景が、人間の破壊行為によって「たった一頁の分量」(“a single sheet”)に痩せ細っている、というのだ。ここでは、自然は「一瞬にして意味内容を読み取ることが可能な」(“perused in a moment”)

(13) Ernest de Selincourt, ed., *William Wordsworth: Guide to the Lakes* (1906; rpt. Oxford: O. U. P., 1981), pp. 18-19. この散文作品の案内書・研究書としては、吉田正憲著『ワーズワスの「湖水案内」』(近代文藝社, 1995年)が有益である。

貧弱な光景に落ちぶれてしまっている。ワーズワスにとっての〈自然の本〉の意味を知っている我々は、詩人の落胆の大きさをこの種の言葉遣いの中に痛々しくも看取してしまうのである。

自然万物を本・教材として捉え、その「本」の真義——物質的、科学的レベルを超えた意味——をアニミスティックな感性で読み取る(感じ取る)、というワーズワスの流儀は、現代の環境論者にいかほどの共感を呼び起こすことが可能であろうか。面白いことに——そしてこれは意味深いことでもあるが——ワーズワスの感性と思想を、我々はアメリカ原住民の世界に見出すことが出来る。近年出版されたエコクリティシズムの優れた論文集 *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology* には、アメリカ少数民族のエコロジカルな世界観を紹介する論文がいくつか見られる。その中でも Paula Gunn Allen の “The Sacred Hoop” と題された論文は出色のものである。彼女の次の発言は、ワーズワスの世界とアメリカ・インディアンの世界がいかに近いものであるかを示唆している。

In American Indian thought, God is known as the All Spirit, and other beings are also spirit—more spirit than body, more spirit than intellect, more spirit than mind. The natural state of existence is whole. Thus healing chants and ceremonies emphasize restoration of wholeness, for disease is a condition of division and separation from the harmony of the whole. Beauty is wholeness. Health is wholeness. Goodness is wholeness.... The circle of being is not physical, but it is dynamic and alive. It is what lives and moves and knows, and all the life forms we recognize—animals, plants, rocks, winds—partake of this greater life.⁽¹⁴⁾

「神」および自然万物の本質を “spirit” として捉え、万物が霊的な次元で言わば兄弟として「全体」を構成している、というインディアンの思考は、そのままワーズワスの思考でもある。⁽¹⁵⁾Paula の論文中に引用されている「び

(14) Cheryll Glotfelty and Harold Fromm, eds., *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology* (Athens, Georgia: The Univ. of Georgia Pr., 1996), p. 247.

「この鹿」(Lame Deer) と呼ばれるインディアンの或るシャーマンの言葉も、〈自然の本〉という観点からここで紹介するに値する。

We Sioux spend a lot of time thinking about everyday things, which in our mind are mixed up with the spiritual. We see in the world around us many symbols that teach us the meaning of life. We have a saying that the white man sees so little, he must see with only one eye. We see a lot that you no longer notice. You could notice if you wanted to, but you are usually too busy. We Indians live in a world of symbols and images where the spiritual and the commonplace are one. To you symbols are just words, spoken or written in a book. To us they are part of nature, part of ourselves, even little insects like ants and grasshoppers. We try to understand them not with the head but with the heart, and we need no more than a hint to give us the meaning.⁽¹⁶⁾

このスー族のシャーマンは言う、「インディアンに言わせれば、白人はあまりにもものを見ない。白人は片方の目だけでもものを見ているに違いない」、「我々インディアンはシンボルとイメージの世界に住んでいる。その世界では霊的なものと日常ありふれたものは一体となっている。白人にとってシンボルとは、話されるものであれ、書物に書かれたものであれ、言葉にすぎない。インディアンにとっては、シンボルとは自然の一部、我々自身の一部、蟻やキリギリスの様な小さな虫でさえあるのだ」と。ワーズワスの詩 *The Tables Turned* の最終連は、あきらかにこのインディアンのシャーマンの主張に繋

(15) 神の概念をめぐるワーズワス親子の次の会話が、このことを如実に語っている——
 “How did God make me? Where is God? How does he speak? He never spoke to me.” I [i. e., Wordsworth] told him that God was a spirit, that he was not like his flesh which he could touch, but more like his thoughts in his mind which he could *not* touch. —The wind was tossing the fir trees, and the sky and light were dancing about in their dark branches, as seen through the window— Noting these fluctuations he exclaimed eagerly— ‘There’s a bit of him I see it there!’” See Alan G. Hill, ed., *Letters of William Wordsworth: A New Selection* (Oxford: O. U. P., 1984), p. 173.

(16) *Ibid.*, p. 256.

がるものを持っている。ワーズワスもまた、我々現代人にくもうひとつの眼（“that inward eye”）を見開き、「自然」という「本」に秘められた人間存在の意味を読み解くことの大切さを主張しているからである。

Enough of [the books of] Science and of Art;
Close up those barren leaves;
Come forth, and bring with you a heart
That watches and receives.

(*The Tables Turned*, ll. 29-32)

未開人の原始的感性への先祖返りを一見思わせるワーズワスの主張を、「ナイーブに過ぎる」として——もしくは、「ロマンティック・イデオロギー」の欺瞞として——嘲笑し、捨て去ってしまうか、それともプロト・エコロジストの貴重な人生哲学として尊重し、受け容れるか、我々の姿勢が問われるところである。⁽¹⁷⁾「ロマンティック・エコロジスト」であれば、後者の行き方を無碍に否定はするまい。一部の人々からの嘲笑はもとより覚悟の上で。⁽¹⁸⁾

(17) ワーズワス流のアニミスティックな神秘体験がかなりの普遍性を持つ可能性を、以下の研究書は示唆している。Cf. Meg Maxwell and Verena Tschudin, eds., *Seeing the Invisible: Modern Religious and Other Transcendent Experiences* (Harmondsworth: Penguin, Arkana, 1990); Michael Paffard, *The Unattended Moment* (Naperville, Ill.: SCM Book Club, 1976); Michael Paffard, *Inglorious Wordsworths: A Study of Some Transcendental Experiences in Childhood and Adolescence* (London: Hodder and Stoughton, 1973).

(18) 「ここに掲げる鶴見和子女史（二年前に脳溢血で倒れながらも、歌人として再起。）の言葉は、ワーズワスが現代に生きる詩人／思想家であることを暗示しているように、私には思われる——『(学術論文を書いていたころの自分は) 忙しくて感受性がなくなってたのね。短歌の作用で神経が鋭く敏感になり、感じる力がよみがえった。生きとし生けるもの、生きていないものにも、人間と同じように魂があると確信できるようになったの』(1997年12月4日付『朝日新聞』夕刊より)。」この文章は、筆者が『言文フォーラム』No.18 (九州大学言語文化部, 1998年3月発行) 中のコラム「研究余滴」に「ワーズワスとアニミズムの復権」というタイトルで書いたエッセイ (p. 27) の一部である。鶴見女史の同じ趣旨の発言(『読売新聞』1997年4月26日夕刊掲載) を志村正雄氏の名著『神秘主義とアメリカ文学——自然・虚心・共感』(研究社, 1998年5月発行) 中 (p. 7) に見出したのは、筆者の喜びであった。